

《生誕100年》 吉武泰水と建築計画学

吉武泰水（1952年）

建築計画学を創生し設計界に科学的化合理性を導入多くの優れた人材を育成した

本年11月8日は建築計画学の創生者であり泰斗としても知られる吉武泰水の生誕100年に当たる。吉武泰水は集合住宅をはじめ、戦後の病院や学校などの公共建築物を中心に、建築に計画学の思考を吹き込んだ建築計画学の基礎を築き上げた人である。従来のように建築家自身の知識や経験だけに頼る設計のやり方ではなく、科学的根拠に基づいた計画学という視点を建築に採り入れて、戦後の高度成長期における公共建築の質を向上させた。

また、吉武は母校の東大工学部をはじめ筑波大、九州芸術工科大、神戸芸術工科大などで教鞭をとり、多くの優れた教え子たちを育てたことでも知られる。その多くの教え子たちは今日、集合住宅や病院建築、学校建築など各分野において主導的立場で日本の建築界を牽引する。そして吉武の偉業をたたえその建築思想を次の世代に継承する。かつて日本の建築界にこれほど多くの人たちに影響を与え続けた人がいたのだろうか。その吉武泰水とは一体どんな人だったのか。生誕100年を機に、手元にある限られた資料の中から彼の人物像の一端にだけでも触れてみたいと思う。

吉武泰水は1916（大正5）年、大分県東国東郡（現・国東市）国東町来浦岩戸寺に生まれた。大分県東国東国東町は父親の吉武東里（よしたけ・とうり、1886-1945）の士族であった実

吉武泰水（1952年）

■吉武泰水年譜

1916（大5）年	11月8日、国会議事堂の設計者の一人吉武東里、とよの次男として、大分県東国東郡国東町来浦岩戸寺に生まれる
1936（昭11）年	成蹊高等学校理科乙類卒業
1939（昭14）年	東京帝国大学工学部建築学科卒業 <p>大蔵省営繕管財局嘱託</p>
1942（昭17）年	東京帝国大学工学部建築学科助教授
1955（昭30）年	日本建築学会賞（論文）受賞
1956（昭31）年	工学博士、学位論文「建物の使われ方に関する建築計画的研究」
1959（昭34）年	東京大学工学部建築学科教授
1962（昭37）年	日本病院建築協会会長（～88年）
1973（昭48）年	東京大学退任 <p>筑波大学副学長（～77年）</p>
1977（昭52）年	東京大学名誉教授 <p>日本建築学会会長（～78年）</p>
1978（昭53）年	筑波大学退任、同大名誉教授 <p>九州芸術工科大学（現・九州大学芸術工学部等）学長（～86年）</p>
1981（昭56）年	紫綬褒章受章
1982（昭57）年	日中建築技術交流会会長（～91年）
1985（昭60）年	第二国立劇場設計競技審査会長
1986（昭61）年	九州芸術工科大学退任、同大名誉教授
1987（昭62）年	日本建築学会大賞受章
1988（昭63）年	人間・環境学会会長（～92年）
1989（平元）年	神戸芸術工科大学初代学長（～98年）
1991（平3）年	ファッション環境学会会長（～95年）
1992（平4）年	芸術工学会会長（～97年）
1998（平10）年	神戸芸術工科大学退任、同大名誉教授
2003（平15）年	5月26日、品川区東五反田の自宅にて逝去。86歳

家にあるところだ。父親の吉武東里は武田五一から京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）で建築を学び1907年に卒業。1910年には宮内省内匠寮技手に就任しているから、実際に泰水が育ったのは東京である。ちなみに、父親の吉武東里は、現在の国会議事堂の実質的な設計を大熊喜邦（おおくま・よしくに、1877－1952）とともに担当した。横浜税関（1934年、下元連と共同設計）の設計なども手がけ日本の建築史にその名を刻んでいる。国会議事堂を設計するきっかけになった議事堂のコンペに当選（東里が中心となって宮内省内匠寮の有志が応募）したのが1918（大正7）年のことだから泰水が生まれた年の2年後、東里が30歳前後のちょうど油の乗り切った時期であった。子息の泰水が成蹊高校を経て、東京帝国大学工学部建築学科に進学し建築の道を歩み始めたのはごく自然のことであったのだろう。

戦後日本の集合住宅の標準設計となった「公営住宅標準設計51C型」を提唱

吉武泰水は戦後日本の集合住宅の原型をつくりあげたことでもよく知られている。「食寝分離」と「就寝分離」の2つのコンセプトに基づいて1951（昭和26）年に提唱した「公営住宅標準設計51C型」は、公営集合住宅の間取りとして日本中に瞬く間に普及する「2DK」の原型になった。戦後の慢性的な住宅不足の状態を解消するために政府は、耐火性能が高く狭い敷地でもたくさんの人が住め、標準設計で量産化可能な高層住宅の建設を進めることになり、多くの建築家が様々な提案で呼応した。このとき吉武は、12坪という狭い空間の与条件の中で、空間の分離と生活の重合よって食寝分離と就寝分離の2つの課題を見事に解決した。公営集合住宅の代名詞にもなった2DKの「DK」は、食事をする場と台所との重合から生まれたのである。51C型を開発した当時のことについて吉武は次のように回想している。

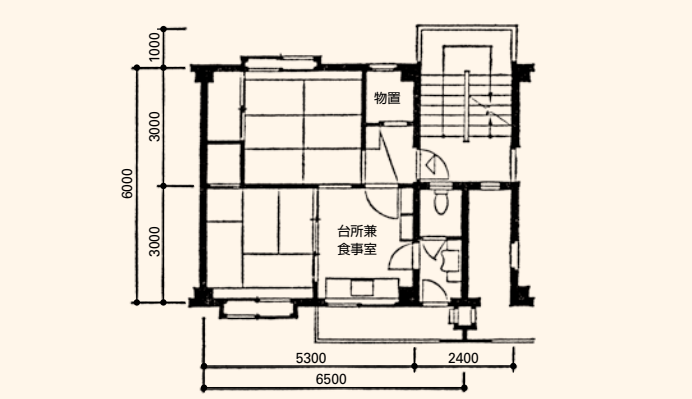
「2室住宅というものは、住まい方の上で著しい差のあるふたつのグループに分けられます。主室食事型は、居寝室のうち大きい部屋が台所に接しているもので、副室食事型は小さい部屋が台所に接しているものです。主室食事型は、大きい方の部屋で食事が行われやすい型、したがって寝室は分解し易いが食寝分離が犠牲になる可能性がある。一方副室食事型は小さい方の部屋が台所に接していて、そこで食事が行われ、食寝分離は行われ易いが、寝室の分解は妨げられる型です」
「ちょうどその頃1950年、51C型という鉄筋コンクリート公営アパートの標準設計に当たって、私どもの研究室はその基本設計をまとめました。特に2つの寝室の組み合わせ方は、今述べ

た住まい方の研究を基に2室とも寝室にあてられるように、つまり寝室の分解を重視して計画しました。更にここではいわゆるDK、ダイニングキッチンというものを採っているわけですが、これも実際の住まい方の調査の中で、たとえ小さくとも台所で家族が朝食をしている例がかなり多く見られたことから、こういうものがあるといいのではないかと考えたわけです」（『建築計画学への試み』）

吉武研究室で共に研究を進めていた鈴木成文は51C型についてこのように語っている。

「計画行為としての51C型の意義は何か。第一には、居住計画の理念として、現実の生活の認識を設計の基礎としてはっきり確立したことです。そして第二には、これによって実現した具体的な住空間の型、住生活の方です」（「住まいにおける計画と文化」鈴木成文教授東京大学最終講義）

51C型は人びとの実際の暮らしぶりを実態調査し、その結果を科学的に分析することで案出されたもの、吉武が創生した建築計画学がベースに貫かれていることは言うまでもない。



1951年公営住宅標準設計51C型

建築計画学の核心は研究と設計の総合

吉武泰水の建築計画学の核心は、建築が個人の恣意に基づくものではなく、地道な調査結果に裏付けられた科学的根拠に基づく設計によってつくられるべきであるという点にあるだろう。今日もなお病院建築の設計ではEBD(Evidence-based design)が話題にのぼるが、すでに半世紀以上も前に吉武によって着手されたテーマなのである。吉武の建築計画学に取り組む最初の基本的な考えは、著書の「建築計画研究から設計へのアプローチ」（『建築計画概論（上）』1967年、コロナ社）の中から読み取ることができる。

「建築は人間の要求をみだし、災害に対して安全でなければならない。この両要請は、それぞれ内部（外部）空間と構築体において実現される。学問領域としては、前者は計画系、後者は構造系に対応するが、前者はさらに人間生活のおもに生理

的側面を扱う環境計画学（計画原論）と、おもに社会的側面を扱う建築計画学（設計計画）に分かれる。これらは建築的スケールあるいは人間的なスケール、いいかえれば人間の五感に直接感じられるスケールの範囲を問題としている点で、都市計画と分けられる」（中略）「人間生活の心理的側面は設計に当たって重視されているにもかかわらず、研究として取り上げられるようになったのは比較的新しく、ようやく近年計画の二分野から探求が試みはじめられたにすぎない」

「設計は、上記計画、構造、設備の諸要請を関係知識を用いてバランスよく総合するものであるが、そういう設計そのものの学ともいうべきものはまだないといってもよい。ただ建築計画の研究は、設計の主導理念としての建築の機能、いいかえれば他の学問成果をあげてそこに結集すべき目標を探求する点で、設計に対する関係は他の分野に比していちだんと深いわけであり、その意味から設計計画と呼んでも必ずしも不当ではあるまい。けれども設計の学としてはまだふじゅうぶんなことも明らかで、そのことが現在の研究範囲を出てもっと設計に迫るような研究をすべきだという、内外批判の因ともなっている」

吉武の目指す建築計画学は研究と設計の総合だが、実際に進めるうちにそこに限界も感じるようになったようだ。「今日の計画の研究は、使われ方の現象の把握から出発し、仮説の設定・検証の繰返しによって進められるべきだが、実際には設計に対する提案にまで飛躍することはあえて避けようとするところに、研究としての限界があるように思われる」
「設計においてすべての研究成果は、設計者のもろもろの知識体験とともに総合され、一つの建築空間にまとめられる。そのような総合という設計過程をテーマとする研究はまだ開発されていないが、総合された結果としての建築空間に対する研究は、より設計に近い研究といってよいのではあるまいか。ここで建築空間と生活要求との全体的対応を問題にする場合、心理的方法がかなり有力な手がかりとなるであろう。しかし結論をいうならば、研究と設計はあたかも技術と技能のように次元を異にするものである。研究は設計の全過程を埋めつくそうと努めるが、設計はその間に研究成果を吸収して前より高度なものに進展しているであろう」（『建築計画研究から設計へのアプローチ』）

吉武泰水の建築計画学に対する戦後の一貫した関心は、やがて1970年代の後半になると総合的設計の「芸術工学」への取り組みに次第にシフトしていくようになる。（田口 昭）

参考資料
「建築計画学への試み」（1987年）、「吉武泰水山脈の人々ー建築計画の研究・実践の歩み」（2011年、共に鹿島出版）、「吉武泰水先生を偲ぶ」（2004年、吉武泰水先生を偲ぶ会）、「現代日本建築家全集14」（1972年、三一書房）、ほか。